

# 白鷹町立荒砥小学校



明治初期、米沢藩の藩校である興譲館の分校として、置賜地域には5つの「郷校」が設置されました。白鷹町立荒砥小学校もその一つです。  
創立から150年の伝統を受け継ぎながら育まれてきた「琢磨」の精神。山形県内で最も古い歴史を持つ荒砥小学校を取材してきました。

## 郷校として開校

抜けるような青空が広がる初秋のある日。体育帽子を被った子どもたちが次々に「おはようございますー」と、眩しい日差しに負けないくらい笑顔とあいさつで迎えてくれました。時代の流れとともに小学校の再編が進み、白鷹町でも各地区に存在していた学校が統合。それぞれの地域の良さを取り入れながら伝統を重ねてきた荒砥小学校は、昨年創立150周年を迎えました。その歴史を紐解いてみると、学制発布を一年後に控えた1871(明治4)年9月に「郷校」として開校。郷校は、江戸時代から明治時代にかけて交通の要衝地だった荒砥(白鷹町)・小国・小松(川西町)・宮内(南陽市)・宮(長井市)の5カ所に設置されました。郷校は日本にいくつか設置されましたが、山形県



内だけを見れば置賜地域だけ。それは、上杉鷹山公の時代から、学ぶことを大切にしてきた風土があったからにほかなりません。荒砥小学校の校内外を見渡すと、いくつもの目に入る「琢磨」の文字。これは？と尋ねると「荒砥小学校の校是ですよ」とこやかに教えてくれたのは、校長の菅原透先生。写真を見上げ指差しながら、言葉が続きます。「琢磨」は、明治政府の役人だった土佐出身の佐々木高行卿が名づけた「琢磨学校」に由来します。「玉や石を磨くように自らの知恵や人間性を鍛え、有用の材となるように磨き上げていってほしい」との願いが込められたものなのです。菅原校長によれば、「琢磨の教えを基本に、常に大事にしているのは心を一つに、競い合い、励まし合える子どもたちを育てること。



校長 菅原透先生

「知徳ヲ切琢磨磨シテ有用ノ材トレ」と、岩倉使節団の一員でもあった佐々木高行卿が、荒砥小学校へ贈った書



佐々木高行卿

「あいうえお名人」「四かけ人」「たくまバンド」という荒砥小学校独自のユニークな取り組みも、そうした考えのもとに行われています。

## 琢磨の教えが原点の取り組み

おはようございます!

「あいうえお名人」とは、社会で生きていくうえで大事なポイント5つをキーワードに設定したものの、『あ』はあいさつ、『い』はいい姿勢、『う』は歌声、『え』はえんぴつ、『お』はおもいやり。「この5つは、めざす子ども像」なんです」と菅原校長がその内容をさらに詳しく教えてくださいました。

昇降口や教室など目につくところ、この「あいうえお名人」は掲げられています。「子どもたちは意識して取り組んでいますよ。おもしろい取り組みでしょ。思いやりがあり、学年問わずとにかく仲がいいんです」と学校を案内しながら、教頭の木村一彦先生が答えてくれました。



## あいうえお名人とは?

- あ 何事においても基本はあいさつから。
- い 前向きに、主体性を持って物事に立ち向かうためには、姿勢(立腰)が大事。
- う 心が解放され、心地良いときに歌いたくなるように、傍に歌のある人生を。
- え 上手な字より、心を込めて書けるように。
- お 相手を思いやる人に。



昇降口の「あいうえお名人」。その両隣では、卒業生が作ったスタンドグラスがきらきらと光を通していました

「四かけ人」とは、教職員・保護者・地域の人を含めた大人へのメッセージ。手・声・目・心をかけて子どもと一緒に育てていこう、という思いが含まれています。勉強でも体を動かすことでも苦手意識のある子どもにはしっかりと手をかけ、一緒にやってあげられる。できる、体験をすることで達成感が得られ、前向きな気持ちになれるように。また、声をかける瞬間を逃さずに、地域全体で目をかけ、心をつなげ、子どもたちを見守っていく。「そんな風に仕掛けていく人が、めざす大人の姿です。地域の方々には『めんごいな』という気持ちで、ふるさとの将来を担う子どもたちを見守っていただけたらうれしいですね」。自身も白鷹町出身の菅原校長。子ども愛、そして地域愛が言葉の端々にあふれています。



## おいて! 荒砥小学校でがんばりたいこと

鈴木心寧さん(2年生) 算数のひき算のひっ算をがんばりたい

相澤辰樹さん(1年生) たし算、ひき算をすらすらとけるようにしたい

海老名倫さん(3年生) 「あいうえお名人」をめぐってがんばりたい



舟山結音さん(5年生) 3う下を走りず、安全な生活を心がけたい

高橋心瑠さん(6年生) 朝のボランティアであいさつや掃除を進んで頑張りたい

山川夏惟人さん(4年生) クラスに悪いところがあったら注意し、よりよくすることをがんばりたい



## おいて！ 6年間で一番の おもいで

岡崎 隼大さん(6年生)  
水泳の校内記録を3回めりかえ、  
特に6年生ではコンマ1秒差で  
新記録をとったこと



小林 芽生さん(6年生)  
6年生の運動会で、  
本気でやることの  
楽しさを知った

守谷 宗汰郎さん(6年生)  
修学旅行で漁業体験や  
水族館のバックヤード見学など、  
もうできないかもしれない  
体験ができたこと



## おいて！ たくまっこの いいところ！

土屋 学先生  
「いざ」という時に  
みんなで心を一つに  
して、やりとげること

斎藤 真美先生  
素直で思いやりの  
あるところ



丸川 岬太先生

目標に向かい、一丸となって  
物事に取り組めるところ

菅原 菜々先生  
目を合わせてあいさつすること



以前は草がぼうぼうに生い茂っていたという「ひょうたん池」。5年生が「再生したい！」と春から手をかけ始めたそう。ビオトープを目指し、地域の達人を呼んで勉強中

「荒砥小学校の子どもたちは、  
すごく歌がうまいんですよ」と満  
面の笑みの菅原校長は、今年度で  
退職されるそう。「その子の良さ、  
特性を見極めながら、どうやった  
らその子が笑顔になれるのかを  
追求してきたのが、自分の教職人  
生だった」と振り返ります。「子ど  
もたちと積極的に触れ合い、笑顔  
を交わすことによって、子どもた  
ちが安心して、支えられている、

守られていると感じてもらえる  
ような教師になれたらと思っ  
ていた」と話すように、子どもたち  
に笑顔で声をかけ、また子どもた  
ちからも声をかけられている姿  
がそこにありました。パレオポー  
ルとともにあった中・高・大学時  
代、そしてこれまでの経験から、  
モットーは「努力は必ず報われ  
る」。汗して頑張ることの大切さ、  
頑張ったことは必ず将来自分の

糧となることを、他の先生方と心  
を一つにして子どもたちに伝え  
ているそうです。  
歴史のバトンをつなぎ、151  
年目の今、次代への新たなスター  
トラインに向けた荒砥小学校。昔  
も今も、そこにはきらきらと輝  
く、子どもたちのまなざしがあり  
ます。琢磨のバトンは、この先  
も子どもたちの心に受け継がれ  
ていくことでしょう。  
忙しいなか取材に協力いただ  
き、ありがとうございました。



## 一人ひとりのきらきらを引き出して

## おいて！ 荒砥小学校の ここがすごい！好き！

梅津 瑠佳さん(1年生)  
おにいさん、おねえさんが  
そうじのときに、やさしく  
おしえてくれる



東海林 快伊さん(2年生)  
友だちがいっぱいいるところ

茂木 理央都さん(3年生)  
友だちがたくさん  
できることがすごい！



村山 拓弥さん(4年生)  
休み時間に元気に遊んで、  
こまっている人がいたら声をかけたり、  
助けてあげたりしているところ



手塚 心翔さん(5年生)  
伝統の「たくまバンド」の  
迫力がとにかくすごい！



安部 華衣さん(6年生)  
掃除が上手で、  
掃除の後に  
教室がピカピカに  
なっているところ



## 地域と二人三脚で、 子どもたちの心を耕す

「本物」に触れ、「自然」に触れ、  
「人のあたたかさ」に触れること  
で、ふるさとの素晴らしさを味  
わってほしいという思いから、体  
験学習やクラブ活動  
の指導をするのは地  
域の達人たち。学年  
ごとの体験学習で  
は、5年生が田んぼ  
の学習、2年生はと  
うもろこし、1年生  
はさつまいもを育て  
ながら畑の学習を。  
また、町が紅花の主産地であるこ  
とから、『白鷹紅の花を咲かせる  
会』の協力のもと3年生が中心と  
なり、紅花の種まきから収穫、紅も  
ち加工、染め体験も行っています。  
「土に触ったり、植物の匂いを  
嗅いだりする：感性を育てる上  
でもとても大事なことです。五感を生か  
した活動は、子どもたちの心を耕すこ  
とにつながるので、そうした体験  
を多くさせたいと思っています。  
地域に根差し、人々の力を得なが  
ら、共に子どもたちを育てていま



す。菅原校長の話から、子どもたち  
の活動の様子が目に浮かぶよう。  
コロナ禍でさまざまな制約を  
受けながら学校生活を送ってき  
た子どもたち。「私たち大人は  
これまでさまざまな体験を重  
ね、知ったうえで我慢をして  
いますが、子どもたちは体験  
することなく我慢を強いら  
れ、これが当たり前のことと  
して育っています。発達段階  
に必要な体験や友達と密に  
なって遊ぶことを止められ、  
エネルギーが少し足りなくなっ  
ているかもしれません。時間が限  
られた学校教育の中で、2年間の  
プランクを埋めるためにできる  
こと、子どもたちに必要なこと  
を考えた時に地域との関わりがと  
ても大事で、一つひとつの体験が  
子どもたちの財産になると確信  
しています」。菅原校長の話から、  
歯がゆさを感じながらも、子ども  
たちの成長と笑顔のために、最善  
の方法を模索し続けている様子  
がわかりました。

机を離れての外での学習は、子どもたちの目や心にたくさんの“きらきら”を生んでいます

